

お客さん—神聖 なる存在—

ハサン・グリイェフ
歴史学博士、教授

我々はアゼルバイジャン人のもてなしについて何を
知っているか？



もてなしの伝統が、歴史上は深い根を持ち、全世界の民族が持っている。他の伝承と並び、各々の民族には独特なおもてなしの儀式、接待のやり方、また友人の家を訪問するルールがある。

もてなしの儀式は、部族から離れてしまった人々や、守護が必要となる人々や迷子になった旅行者に宿を許与するような儀式として原始社会の時代まで根を生やしている。当時、それぞれの部族との関係が薄く、あらゆる客が情報源だったので敬意をもって扱われたのである。ホメーロスの時代にギリシアではすべ

ての外人がゼウスによって防衛されるように認識されていた。(大百科事典、サンクトペテルブルク、1902、第七巻) 様々国々(ダゲスタン、北コーカサス、シリア、アラブ諸国等々)ではもてなしが聖なるもののように考えられ、家に不倶戴天の敵が来ても、家長がその人をもてなしによって迎え、見送り、その人の命に何も危険を与えなかった。(『諸民族のもてなしの習慣について』、G. A. グリイェフ、「客ともてなし」、「エリム・ヴェ・ハヤット」雑誌、1971、4号)

アゼルバイジャン人は昔から非常に面白い、今日の要求に応じるような教訓的なもてなしの習慣がある。

アゼルバイジャン人のもてなしに関する最初の筆記資料は「デデ・コルクット」民族文学でみられ、そこに「お客さんが居ない家が壊れるように」(「ゴナグ・ゲリメイェン・ガラエヴィレリ・ユフルサ・イェイ」と書いてある。(「賢明な一言」、バクー、1979)

アゼルバイジャンでのもてなし習慣について12世紀の文学作品の中で情報がある。偉大なニザミ氏の『イスケンデルナメ』という小説では、バルダ市に於けるニュシャバ宮殿のイスケンデルの接待について、お客様歓迎会のために壮麗な食卓ができていた、と書かれている。(ニザミ・ギャンジェヴィ、『イスケンデルナメ』、バクー、1983)

アゼルバイジャンのもてなしに関してはフィズリ氏(16

世紀)の小説でも描かれている。「スフレメ・ヘル・ビル・ゴナグ・ゲリセ・ヘジャレット・チェキメレム、フェルギ・ヨフ、ヤ・テュルク・ゲリシン、ヤ・エレブ、ヤ・エジェム」(私の食卓にお客さんが来たら、その人がテュルク人であれ、アラブ人であれ、異教徒であれ、恥ずかしくならん)。(「賢明な一言」、バクー、1979)

アゼルバイジャン人は、お客さんに対して非常に慎重で、丁寧であった。当時、アゼルバイジャン人のもてなし



についてロシヤや近東でも知られていた。史料によれば、デルベンドではピョートル1世や、バクー及びサリヤンではドルゴルキ公侯や、シュシヤではシャマヒ市の軍知事や、グバではA. ベストウジェフ死や、グサールではM. Y. レルモントフ氏や、A. バキハノフ氏の家ではカザン大学教授I. ベレジンをいかに暖かく待遇していたかについて書かれ

ている。

アゼルバイジャン人のもてなしの良い例として、16世紀にシャマヒ市のベクリヤリベイであるアブドゥラ・ハンが貿易関係で訪れた英国の宣教師のエントニ・ジェンキンソン氏とオルコク氏を歓迎するために行った接待が挙げられる。接待では290もの料理が盛られた。A. ジェンキンソン氏が次の述べている。「食事の時間が近づいてきたら、床に布が敷かれ、様々な料理が盛られてきた。私が勘定した限りでは、それらが140であった。それらと布が片付けられた後、150もの果物入りの料理などが出されたのである。それで、2回で290の料理が盛られたわけである」と書いている。(『旅行者らがアゼルバイジャンについて語る』、バクー、1961、第一巻)

ドイツの学者、ケンプフェル氏が1684年にアゼルバイジャンを訪問した時に、スラハニでの拝火教寺院に言ったら、ピナ村の人々に家に誘われた。彼は次のように語っている。「日が暮れたら、隣の村ボンナで待遇してもらった。(V. M. スソイエフ氏による、そこが現在のピナ村である)我々は、ここでとても暖かく迎えてもらい、床が絨毯で敷かれている家に招待してもらった。その人々は我々と汚いキャルヴァン・サライで馬夫と一緒に下宿させなかった。」(V. M. スソイエフ、『17世紀におけるアゼルバイジャンのテュルク民族』、バクー、1926を参照)



また、アゼルバイジャン人のもてなしについて19世紀の文学で著しい情報が書かれている。アゼルバイジャンがロシアに結合したら、地元の生活様式や習慣を学ぶロシアの役人がこの人々のもてなしの習慣を喜んでいたとのこと。これに関してはその時の史料が山のほどある。少し紹介しようと思う。

『1832年、F. L. シニトニコフのクバ州に関する記述』という文書では「(クバ州の人々) 性格の良いところが宗教、もてなし、庇護、迫害者に宿を譲るといような規則を守ることである」。(『18-19世紀のダゲスタンの歴史、地理、民族』、モスクワ、1958)

他の著者はシルバン州に

ついて記述、「タートル(アゼルバイジャン人)にとってもてなしが神聖である、だれでも人をよりよく待遇することを常識として考えている」と指摘している。(1836、第4巻)

19世紀40年代のアブシェロンの人々のもてなし心に関してカザン大学教授I. ベレジン氏がブゾヴナにいた時に詳述した。(I. ベレジン、『ダゲスタンとサカフカージェへの旅行』、カザン、1850、第一巻)

19世紀前半のアゼルバイジャン人にもてなしが一般であったことに関して風刺家であるK. ザキル氏が詳しく情報を与える。(カスンベイ・ザキス、『作詩』、バクー、1964 (アゼルバイジャン



語)彼の詩を見てみよう。

ギャナエット・エイレレン・デュユンデン、ヤグダン、

ネ・ヴァル・イセ・エシルゲメ・ゴナグダン!

ヤトマガ、ドウルマガ・ザンギン・オタギン、ヴァルドウル

ネ・ゲデル・アシュ・ピラフ・イエセ・ゴナギム、ヴァルドウル。

(油や米を節約していいが、客さんにはあるだけのものを惜しまない。下宿にはいい部屋を持ち、お客さんのために十分なピラフを持つ)。

また、19世紀半ばに偉大なフランスの小説家であるアレクサンドル・デュマに対するシャマヒ市マフムド・ベイのもてなしも著しい。デュマは、招待されたマフムド・ベイの家がデルベントやトビリシで見た家と違って、より美しかった。家の東のホールの美しさを言葉で表現できないほどきれいだったという。(『アレクサンドル・デュマとアゼルバイジャン』、「アダビヤット・ヴェ・インジェセネット」新聞、1984年7月8日付けを参照)

民族的資料からみれば、アゼルバイジャン人のもてなしの特徴は、家に寝具が多すぎることである。それは、19世紀初頭の史料にて指摘されている。そこに「お金持ちの家では鮮やかな色で描かれた壁や刻まれた木の飾られた天井を見ることができる。目に見えるものが羽布団、枕、他の絹や金色で織られたものばかりである」と書いてある。

(1836、第4巻)

19世紀後半の史料を見てみよう。「必要だと判断したら、イスラム教徒がきっと豪華で親切なもてなしの全ての要求を果たしている。」(『絵のようなロシア』、第九巻)

山で迷子になってしまった人々、あるいは疲れた旅行者のために作られた隠れ家(アマン・エヴレリ)が今でも

古物の記念としてアゼルバイジャンに残っている。それは、アゼルバイジャン人が自分の家でだけでなく、外でももてなしの心を表わし、旅人に村から離れた場所でも宿を譲っていたと分かるだろう。

アゼルバイジャン人の民族的な現実において親しい人や高位の人を待遇する幾つかの習慣的な手段が定まっている。人々はお客さんを迎えるために特別な場所で集合していた。人々は二つのグループに分けられていた。一つのグループは長老(アグサッカ



ル)が率いた。もう一つのグループが役人をはじめ、歌手や音楽家などが一番のグループを追っていた。彼は歌いながらお客さんを迎え、シャベット、パンと塩をごちそうしていた。お客さんが家に入ったら、足元にきれいなクバ流、カラバフ流、シルバン流の絨毯が敷かれ、絨毯の上にはティルマ・ザルハラが敷かれていた。

他の習慣によれば、お客さんの足元で羊を切り、お客

さんは犠牲動物を踏み越えていた。羊肉が貧乏人に配られていた。19世紀50年代の資料では、このようにシュシャ人がシャマヒ市の軍知事を迎えていたという。「町に入る前には、我々の前に牛が切られ、その地が我々の馬の脚元で流れていた。牛の肉は貧乏人に配るためにモスクに届けられた」。(「シャマヒからの手紙」、K.、1857年、56号)

17世紀のトルコ人の旅行者E. チェレビ氏によれば、バクーには客を待遇するために特別な役人(メフマンダル)がいた。お客さんが家に入る前に、伝統上ヤシマクを被っていた(顔が覆われた)若い女の子がお客さんの靴を脱がせ、その人の足を温かい水で洗っていたという。

民族学的資料にすれば、アゼルバイジャンではお客さんが幾つかのカテゴリーに分けられていた。それは、役人、外人、親戚、同村人、同市民、女性、互いによく家を訪れていた人たち等である。すべての村の人々に隣の町か離れた所に友人(ゴナグ)がいた。伝統上、野で事業が終わったら、年1回でも決まった時間に互いの家を訪れることであった。具体的な例を見てみよう。ナジャフ・キシ(クバ地域のデレ・チチ村の人)が言うには、19世紀に彼の叔父にチュミという山の村に友人(当時、ゴナグ—お客さんと呼んだ)がおり、果物(リンゴ、なし等)を収穫し終わったら、秋か春にその人を訪れていた。家族が園から

戻ってきていた。主人がギフトとして鮮明や乾燥した果物を持っていた。

また、民族学的資料ではもてなしの他の形についても情報がある。果物や葡萄を収穫したら村の人々がお客さん—親戚、近所の人—を呼び、収穫を見せ、経験を共有し、相談し合い、ニュースを話し合っていたという。その後、おいしい食べ物ばかりの食卓の用意がされていた。この習慣をオールドゥバド市の園芸家が「ボスタン・ポズマ」と呼ぶ。ここでは、他の地域とちがって、果物や野菜の新種を栽培する秘密を共有しなかった。園を持っているあらゆる人がお客さんに西瓜やメロンの新種を見せていた。最後に芝生の上に座り、お客さんにキャバブをご馳走し、見送るときにギフトとして西瓜やメロンを贈っていた。

アゼルバイジャンは伝統上、お客さんに贈り物をあげずに帰らせなかった。お客さんも来る時にプレゼントを用意した。例えば、園芸をやっている地域ではお客さんに乾燥果物、リンゴなどをあげる。毛織物を生産している地域ではお客さんに手袋、靴下、ベルトなどをあげる。

クバ・ハチマズ地域、そしてイスマイル地域でもお客さんに糸に通された乾燥なし、クルミ（「ルサ」）、なしかくわのドシャープ、アルマリチャル（リンゴのジャム）を贈る。牧畜業をやっている人々はモタル、チーズ、油などの乳製品を贈る。

また、お客さんを迎え

る、待遇する特別な習慣があった。この習慣を成立するのにそれぞれの民族にそれなりの規則があった。アゼルバイジャン人のもてなし、お客さんへの尊敬が大昔に遡る。アゼルバイジャンではお客さんに一番おいしい料理を盛るとするのが常識とされており、例えば、ティキヤ・ケバブ、タス・ケバブ、ピラフの色々な種類などが取り上げられる。それらは様々なスパイス、緑、ノンアルコールの飲み物と合わせて盛られていた。習慣によると、食事する前に、若い男の人が水差しと平鍋（アフタヴァ、レイエン）を持っており、お客さん



を周り、水を彼らの手に注いだ後、手を拭く為にタオルを渡していた。食事の前に、希望者にコーヒーとカリヤン、その後レモン入りと多種多様なジャムを盛っていた。料理を盛るために、特別な順番があった。各々の料理が順番に出されており、料理を全部一気に出すのが非常識とされていた。このようなルールを守るのにいい点もあった。まず、料理の間にポーズができることでお客さんが休んだり、話したりすることもでき、すべての料理が一気に出されると、お客さんがそれ

らの食べる順番に迷っていただろう。そのうえに、様々な料理の匂いが食欲を失わせただろう。

アゼルバイジャンでは昔と同じく、今でもお客さんを順番に主人の親戚や近所の人達も家に誘う習慣がある。昔は、家の主人が何かの理由で欠席していたら、お客さんを家内か年上の人を迎える必要があった。

夜になると、お客さんの周りに親戚、主人の隣人、同村人が集まり、3、4時間にわたって色々な話しをしていた。メディアがない時代にはお客さんが情報の所持者としてされており、あらゆるニュースが大いに人々を驚かしていた。

お客さんが特別な部屋で寝させてもらっていた（因みに、アゼルバイジャンのほぼ各家ではそのような独特な部屋—客室—がある）。ある地方ではお客さんのために特別な「バラハナ」という室が備わっており、それはお客さんが家族の一員に会わず直ぐ自分の部屋に行けるように家のゲートに近く、2階にできていた。お客さんの部屋の壁には、ナマズ（お祈り）をするために必ず祈祷の絨毯が掛けてあった。バラハニや様々な寝具といのは、アゼルバイジャン人が如何に客好きであったかを明らかにしている。なので、もう一点に注目を集めてもらいたい。昔、あらゆる家族は、できるだけ「ゴナグ・オタグ」（客室）の清潔さに注意を払っていた。その部屋の天井が絵で飾られ、壁

と床が絨毯で敷かれ、高い兵器が掛けられ、棚には高く装飾的な食器で飾られていた。今でも、アゼルバイジャンの地方ではお客さん向けの部屋がとても清潔で、お客さんがいる時だけ用いられる。V. タティアシビリ氏は、コーカサスの家の中の最良の部分が客室（ヒナリック村について）であり、そこが常にきれいで、絨毯などで飾られているから、家族自体が使っていないからである（V. タティアシビリ、『ケトシ国』、「バクー作業員」新聞、1927年12月3日付け）。アゼルバイジャン人の

客好きであったことに対する証は、民間伝承の中でもよく語られている。また、諺でさえもてなしに関する豊かな情報が含まれている。例えば、「客好きの人の食卓が乏しくならん」、「お客さんが繁栄をもたらす」、「我がお客さんを連れた道、その人の犠牲になるように」、「お客さんがいない家は、水がない水車のごとく」、「お客さんが自分で来て、その人を見送るのが主人である」、「お客さんに食べなさいと言わない」等々である。（「諺」、バクー、1981を参照）

B. ヴァハブザデ氏が描い

た伝説の中でもお客さんへの尊敬に関する次の様な表現がある。あるアゼルバイジャンの家族の主人がお客さんを扱っていた時に、一人っ子の赤ちゃんがお湯入りの鍋に這入って、その中に落ちてしまった。それを見た母親が赤ちゃんの死体を静かに何かで巻き、隠し、お客さんが去るまで黙っていた。お客さんを見送った後、女性が主人に本当を暴かし、泣きだした。

（B. ヴァハブザデ、『バヤティ』、「エリム・ヴェ・ハヤット」雑誌、1973、1号）このように、家族は、もてなしの倫理を破らず、もてなしは神聖なるものとして考えられており、お客さんの気分を悪くさせるのがありえないことであつたのである。

そこで、上記をふまえ、アゼルバイジャン人が客好きであったことを明らかにしてきた。すべての習慣は現在のところも継続しており、近代化した生活様式の条件に適されてきている。★

